

（１）本年度のN I E活動の概要

指定校2年目の本年度は、「新聞に興味を持ち、集めた情報を友だちと共有し、自分の考えを伝え合える子ども」を研究テーマとした。特に相手意識を持って表現する学習場面、それを振り返る学習場면을意図的につくり、課題の解決に向かうことを大事にして、全学年・全教科で取り組んできた。

本年度は発達段階に応じて国語、社会の学習場面だけでなく、図工の造形遊びや総合、道徳など、新聞を身近な情報源、素材として活用する場面が増えてきた。新聞を読む、新聞にふれることを入り口に、新聞がすぐ手に取れるところにあるという環境づくりをしたことが、自分で新聞を作る時に参考にしたり、調べ学習に活用したりする姿につながっていった。

6年社会科の授業では、相手に「伝えたい」「聴きたい」という思いを大切にして、小谷村とつながりの深いイギリスをテーマにして調べ学習を進めてきた。発表場面で双方向のやり取りが生まれるような工夫（ポスターセッション）をしたことが、子どもたちの意欲的な姿につながっていた。本・インターネット・人に聞く・そして新聞というさまざまな情報源から調べ学習をしていく中で、それぞれの長所と短所を感じ、新聞の持つ魅力に自然と気づくことにつながっていた。

これからも新聞を活用しながら、児童一人一人がいきいきと輝き、「聴きたい」「伝えたい」と対話を通して学ぶ授業をつくっていきたい。

（２）本年度のN I E活動の取り組み状況（4月時点）

本校は全校児童117人、各学年1学級、計6学級の山間地小規模校である。単級のため保育園から中学校卒業までほぼ変わらない仲間たちと毎日の学習をしている。

本校の図書館は登下校や教室移動など、いつも子どもたちが通る学校の中央に位置している。イタヤカエデで作られた新聞閲覧台には子ども新聞が毎朝置かれ、多くの子が足を止めている。

指定校1年目の昨年度は、5年生の総合「小谷の棚田」の学習で、自分たちが感じたよさや年々棚田が減っていくことへの危機感を共有した子どもたちが、13年前の荒れた棚田の写真や新聞記事をもとに、それを復元した人々の苦労や大変さに気づき、自分たちの棚田について考える授業を行った。また、他の学年でも社会の学習で新聞づくりに取り組んだり、新聞閲覧コーナーや各教室に配達された新聞に目を通したりする姿が見られた。

指定校2年目となった本年度は、6年生を中心に、全学級で新聞にかかわる学習に取り組んできた。国語や社会科、総合的な学習の時間、そして図工といった教科の学習や学級の係活動と関連付けた取り組みができるように研究を進めていくことにした。

（３）N I E活動のねらい（育てたい力）

本校では学校教育目標「一人一人が いきいき輝く 小谷っ子～とことんまなびきたえる だいじなあなたとわたし こころにひびくこえ～」のもと、「伝え合い、考えを深め合う 小谷っ子～聴く、伝える場面に視点を当てて～」を本年度の全校研究テーマとして研究を進めている。全校研究テーマを受けて、N I E研究部会では、「新聞に興味を持ち、集めた情報を友だち

と共有し、自分の考えを伝え合える子ども」と研究テーマを設定した。また、各学年の児童の実態に合わせ、以下の３点を願う子どもたちの姿と考え、取り組みを進めてきた。

- ・新聞に興味や関心を持ち、情報を集めようとする（主体的な学び）
- ・気になる記事を伝え合う、聴き合う情報交換（対話的な学び）
- ・相手意識を持って表現し、お互いの考えを深める（深い学び）

特に相手意識を持って表現する学習場面、それを振り返る学習場面を意図的につくり、課題の解決に向かうことを大事にして、全学年・全教科で取り組んでいる。本年度は「聴く、伝える場面」に焦点を当て、子どもたちが対話の中で協働的に学んでいく中に、どのような学びの姿が見られるのか、新聞活用の有効性を取り入れながら探っていきたい。

（４）全校での取り組み

《全校児童が新聞に触れ、親しむ取り組み》

本年度も通常の新聞閲覧台の他に、図書館に全国紙６紙と子ども新聞１紙の読み比べができる新聞閲覧コーナーを設け、全校児童がいつでも読めるようにした。並んだ各紙の一面記事を見て、「令和」への改元にかかわる皇室行事や消費税率、ラグビーワールドカップのことなどが学級の朝の会で話題にのぼることがあった。

それでも新聞閲覧コーナーに足を止め、新聞を読んで興味を持つ子は限られていた。そこで本年度は子どもたちが新聞配達をすることになった。３年生が配達員となり、毎朝職員室から新聞を持っていき、図書館の新聞閲覧コーナーに並べた。閲覧が終わった前日の新聞を３～６年の各教室に配達するようにした。

《各学年の取り組み》

〈１年生〉

図工「やぶいたかたちからうまれたよ」では新聞を自由な形に手で切り抜き、貼り絵をして作品に仕上げた。写真や広告のデザインを造形にうまく取り入れようと思ひ、工夫を凝らす姿が見られた。

〈２年生〉

国語では新聞からの漢字探し、生活では学習のまとめとして壁新聞作りに継続して取り組んだ。（乗り物遠足、ペットボトルの船、音楽会・運動会、夏休み、お正月）また、信毎の一面記事の写真を使い、台風被害と命について考え合った。

〈３年生〉

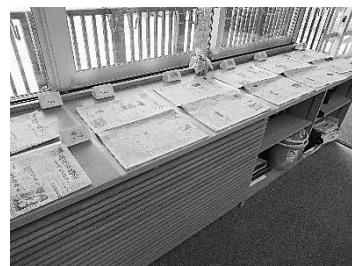
３年生では係活動としての新聞配達のに、配達された子ども新聞をテスト終了後や読書の時間に読んで意見交換する場を設けた。興味を持った記事について席を離れ、自由に意見交換する姿が見られ、多くの子が新聞に興味を持つきっかけを作ることができた。また、図工では造形遊びの学習として「新聞紙 de ファッションショー」に取り組んだ。

〈４年生〉

国語「新聞を作ろう」では、実際の新聞の紙面を見ながら、新聞名や見出し、本文など、何がどのように書かれているかを調べ、自分が作る新聞のレイアウトを考えた。国語「アップとルーズで伝える」では、実際の新聞の中からアップで撮られた写真とルーズで撮られた写真を探し、その写真が何を伝えようとしているのかを学習カードにまとめた。

〈５年生〉

教室環境のユニバーサルデザインの一環として、児童が手に取りやすく見やすい展示コーナーを設置した。1週間分の新聞を曜日ごとに並べたり、注目してほしい記事に付箋をはったりして焦点化を図った。また、展示が終わった新聞は棚の下に保管し、すぐに取り出せるようにしたことで、1人1新聞を使うような学習内容の際に、滞りなく授業を進めることができた。児童の動線に新聞を掲示しておくことは風景になりがちであるが、新聞展示に意図を生じさせることで学習教材となる。



〈6年生〉

道徳の授業では、環境問題を考えていくきっかけとして新聞記事を利用した。また、日本各地に影響を及ぼした台風にかかわる新聞記事を切り抜き、被害の現状を知ることで、予定されていた千葉県の小学校との交流で何ができるかを考えることができた。

（５）公開授業などの活動内容

6年 社会 「日本とつながりの深い国々」

【本時に至るまで】

英国大使館への訪問

小谷小学校6年生は、本年度、村の姉妹都市であるイギリスのオッターリーセントメアリー町との縁をきっかけに、修学旅行で英国大使館を訪問することになった。訪問をとっても楽しみにしていた子どもたちであった。当日は、ポール・マデン大使によるお話や、セーラ夫人による館内の案内、近衛兵たちによる生演奏など、想像をはるかに上回る“おもてなし”に興奮しきりだった。誰でもできるわけではないこの貴重な経験を、子どもたちの学びにつなげたいと考え、社会科の単元を設定した。

“人”を感じ、「優しい国」と語る煌大さん

単元のスタート時、「日本とつながりがある国ってどんな国があるだろう」と投げかけると、真っ先に「イギリス！！」と子どもたちから言葉が返ってきた。イギリス大使館での思い出を語り合う時間、ポール・マデン大使やセーラ夫人と一緒に撮った写真を見せると、煌大さんはじっとその写真を見つめ、「いい写真…」とつぶやいた。その後も、「あの絵がすごい！！」「シャンデリアきれいだった」「ラグビーの金色のやつが…」と次々に思い出を語っていった。「あれ、ラグビーの金色のやつなんてあったっけ…」という教師の反応に、煌大さんは「えっ、見てないの！？もったいない！！」と声をあげた。彼にとって、英国大使館で過ごした時間がかけがえのないものであり、英国大使館でのその時その時を全身で感じとっていたのであろう。

その後、「イギリスって、今のみんなにとってどんな国？」という問いに対し、煌大さんは勢いよく手を伸ばしていった。その勢いに誘われるように、後ろを振りむいた友に自分の書いた言葉を何度も指でさしつづけた。そこには「優しい国」と綴られていた。声にして全体に届けた言葉もやはり「優しい国」だった。「どうして？」という教師の問い返しに、すぐさま「ポール・マデンさん」と答えた。“ポール・マデンさん”という人とのつながりが、煌大さんにとってのイギリスという国の印象を大きく形作っていた。



“人”を窓口にして、「優しい国」というイメージを抱いた煌大さんが、さまざまなイギリスの文化や生活に触れていく中で、そのイメージがどう広がったり深まったりするのか、この先が楽しみになるとともに、人を思う気持ちにあふれた煌大さんの内面に思いをめぐらせる時間で

あった。

日本の中にもイギリスがあった！

自分の興味をもった分野を中心にイギリスについて、グループごとの調べ学習を行っていった。調べ学習は、車・歴史・王制や有名人・食べ物・学校・有名な場所・お祭り・スポーツ・文化という9つのグループに分かれて行うことになった。煌大さんは、「有名な場所」を選んだ。調べ学習の時間には、観光名所の写真を見る度に「名前聞いたことある！」と、友と一緒にまとめていった煌大さん。バッキンガム宮殿や、ビッグベンを調べる中で、「もともとは、イギリスの王様たちが使っていた場所が有名になっていることが多い」とつぶやき、「やっぱ有名な場所が多くていい国王制がよくわかる」とイギリスという国へのイメージを更新していった。

また、信濃毎日新聞データベースを活用し、イギリスにかかわった記事を調べていると、「ビッグベンの鐘の音停止」という記事に出合った。「今は、ビッグベンの鐘って鳴ってないんだ」とつぶやくと、「先生！！日本の中にイギリスがあった！！」と、煌大さんが大声で伝えに来た。見ると、記事の終わりには、ビッグベンの鐘の音にかかわって「日本では、そのメロディーが多くの学校のチャイムに使われてきた」という一文があった。煌大さんにとって、ビッグベンの鐘の音が自分たち学校生活の中に、当たり前のように鳴り響いていたチャイムとつながった瞬間であった。その後、チャイムが鳴るたび、友に「チャイムの音ってもともとは何の音か知ってる？」と尋ねる煌大さん。煌大さんにとって、いつもの“当たり前”の学校のチャイムが、遠く離れたイギリスとつながった時、これまでの“当たり前”が“当たり前”ではなく、その

チャイムの音の中にイギリスという国を感じるようになっていったのだろう。

調べ学習が進むにつれて、「優しい国」と語っていた煌大さんのイギリスのイメージは「なんだか王制が強そうなイメージになってきた」と、広がりを見せていった。煌大さんのグループに限らず、本・新聞・インターネット・インタビュー活動を通じ、一人ひとりが自分の調べた分野からイギリスに対する見方を広げたり、深めたりしていった。自分の分野からイギリスのイメージを編みなおした子どもたちが、別の分野

からのイギリスをとらえ、さらにイギリスのイメージを広げたり、深めたりすることを願って、本時を迎えた。

【育成する資質・能力】

〔知識及び技能〕	〔思考力、判断力、表現力等〕	〔学びに向かう力、人間性〕
・我が国と経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活は、多様であることを理解するとともに、スポーツや文化などを通して他国と交流し、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であることがわかる。	・外国の人々の生活の様子などに着目して、日本の文化や習慣との違いを捉え、国際交流の果たす役割を考え、表現することができる。	・つながりの深い外国について外国人や外国での生活経験がある人に進んで話を聞いたり、関連する資料を収集したりして意欲的に調べようとしている。 ・友だちとかかわりながら、意見を聴いたり、伝えたりしながら、考えを深めようとしている。

【主な学習活動と留意点】

前単元からのつながり：「修学旅行をふりかえろう」（総合的な学習の時間）において、英国大使館での見学を振り返り、英国大使ポール・マデンさんへのお礼状を作りながら、自分の英国大使館のイメージを文章で表現した。

働かせる見方・考え方：英国大使館での見学や、ポール・マデンさんのお話から感じたイギリスのイメージやイギリスへの親近感を、追究の意欲に結びつける。
「なぜ」「どうして」という問いを毎時間つなげていくことで、追究を深めていく。

	□学習問題（時間）	留意点
課題把握（つかむ）	□イギリスは、どんな国なんだろう（１）	・自分たちにとって、身近な外国はどこの国か尋ねる。 ・修学旅行の英国大使館の見学を写真や友だちとのやりとりからふりかえり、自分たちの知っているイギリスについて経験をもとに考えることができるようにする。
課題追求（調べる・考える）	単元の学習問題：自分の興味を持った分野から、イギリスはどんな国なのか考えよう。 ・ラグビーワールドカップ、EU離脱問題が話題となったよ。 ・この前、フィッシュアンドチップスが給食で出たね。 □自分の興味をもったイギリスのことを調べてみよう（３） ・スポーツ→ラグビー、サッカー、テニスが生まれた国だ。 ・衣食住からくらしを見てみよう。 ・言語、国旗、人口、位置、貿易などを確かめていこう。 ・有名な観光地、特産品はどんなものがあるんだろう。 ・学校の様子→校長先生に聞いてみよう。 ・歴史的つながりはどうなっているのか。 □自分や友だちの調べたイギリスのことをまとめよう（２） ・調べてきたことを発表しよう。【本時（５／６）】 ・日本とイギリスの違いについてまとめよう。	・マインドマップを使い、自分の興味のある分野から調べたいことを広げることができるようにする。 ・新聞記事や本の活用（活字媒体の情報） ・人へのインタビュー（人から得られる情報） ・インターネット検索の活用（ネットの情報）
課題解決（まとめる）	【ねらいを達成した子どもの姿】 イギリスの人々のくらしや文化などを調べていくと、日本と同じところも違うところもあった。特に日本とは違うイギリスならではの文化を大切にすることが、お互いの国のよさを認め合い、尊重し合うことにつながるということが分かった。	・調べたことをポスターセッション形式で発表しあう。 ・日本との類似点・相違点に着目してまとめていく。



次単元へのつながり：資料をもとに自分の興味のある分野から外国の様子を見たり、日本と比較したりしながら外国の様子を調べて、日本とつながりの深い国々の様子に気づく。

【本時案】

主眼

自分の興味のある分野からイギリスについて情報を集めて模造紙にまとめた子どもたちが、自分の調べたことを発表役と聞き役に分かれてポスターセッションで発表し、日本と「つながり」「似てる」「違う」「驚き」という視点から、意見交換することを通して、イギリスの文化や習慣への興味をもち、イギリスの人々の暮らしについて自分の見方を広げることができる。

展開

段階	学習活動	○予想される児童の反応	○支援 ◇評価	時
導入	1 本時のめあてを確認する。	単元の学習問題：自分の興味を持った分野から、イギリスはどんな国なのか考えよう。 ○イギリスは、第二次世界大戦の時に日本と敵対したから、その時は友好関係は全くなかったと思うことは伝えたいな。		3
展開	2 調べてきたことをポスターセッション形式で発表し合う。	めあて：イギリスについて、発表を聞いて、日本との「つながり」「似ている」「違う」「驚き」を見つけて、イギリスがどんな国なのか考えよう。 ○イギリスの車や王制・有名人について自分の調べた歴史とのつながり・似ている・違い・驚きを見ていこう。 ○日本の前の天皇即位パレードの時には、イギリスの車を使っていたんだ。この時には、日本とイギリスの間に友好的な関係があったんだな。 ○第二次世界大戦直後には、イギリスの王室が日本を訪問しようとしてくれていたんだな。敵対していたのに、どうしてだろう。 ○ずっとイギリスと日本は仲がいいと思っていたけど、まさか戦		35

ま と め	3 本時を振り返り、次時に向けての見通しを持つ。	争の時に敵として戦っていると知ってびっくりした。日本でイギリスの車が使われるようになったのも、戦争前じゃありえなかったんだな。	は、発表者が聞いてみたいことを尋ねるように伝える。	7
		○車や王制・有名人の発表を聞いて、戦争でイギリスが敵だったのが、嘘みたいに今はイギリスと日本の交流が行われていることがわかった。これからの日本とイギリスの関係は、自分たちがつなげていきたいと思う。	◇発表を聞いて、感想や疑問を伝えられたか。	
	【本時のねらいを達成した子どもの姿】 友だちの発表を聞いて、自分とは違う分野から見たイギリスについて知ることができた。日本とイギリスは似ているところもあれば違うところもあって、国によって違いがあることがわかった。		○本時を振り返った感想を学習カードに書き、発表し合う。	
			◇友だちの発表を聞いて、イギリスの人々のくらしについて、見方を広げることができたか。 (学習カード)	

（６）児童の反応

煌大さんは、次のように本時の振り返りをつづった。

しっかり発表できてよかった。やっぱり王制がよくわかる。すごく有名な場所がいっぱいあってすごい。意見もしっかり言えたし、とてもいい時間だった。もっと意見や質問をしたい。



煌大さんのグループは、お祭りグループとスポーツグループと発表を聴き合った。本時、他のグループの伝えたかったことが煌大さんの中にある“イギリスのイメージ”にどうかかわっていったのか見とることはできなかったが、イギリスという国を通して、友とのやりとりを楽しむ煌大さんの姿があった。それが振り返りにある“とてもいい時間”という煌大さんの思いにつながったのではないかと考える。一方、「やっぱり王制がよくわかる」という言葉にあるように、友とのやりとりの中で、調べ学習を進めるにつ

れ大きくなっていった「王制が強そうなイメージ」が確かなものになっていると感じている。ポール・マデン大使という人から感じとった“優しい”というイメージ、有名な場所から感じとった“王制”というイメージ、そのどちらも煌大さんにとってのイギリスという国なのだと感じている。ニュースや旅行などこれからの暮らしの中で出合っていくさまざまな“イギリス”にふれることで、自分が抱いたイギリスという国のイメージをさらに広め、深めていってほしい。

（７）成果と課題

授業研究会から

○「話す」「聴く」を成り立たせるためのポスターセッションについて

- ・自信をもって話すための十分な調べ学習ができていた。伝えたいことがとても丁寧にポスターにまとめられており、それが自信をもって発表できる姿につながっていた。模造紙に書かれていないことについて質問が出ても、迷わずに答える子どもたちの姿があった。
- ・グループごとの発表を終え、付箋を書く時間をとってから自然に意見交換が始まっていた。付箋の活用は考えを整理し、対話につなげる手立てになっていた。
- ・写真が多く見やすい。質問もしやすい適度な情報量だった。
- ・少人数で意見交換をしたので、双方向のやり取りが行われていた。

○まとめの学習カードについて

- ・毎時間の単元の学習カードに「似ている」「違う」「つながり」「驚き」の4視点が合った方が、振り返りを焦点化できたのではないか。
- ・観点は「似ている」「違う」の2つでも十分だった。観点が多いと処理しきれない。

○資料の出典について

→資料の出典、信ぴょう性はインターネットを活用した調べ学習の課題。新聞記事には裏付けがきちんとある。

N I Eアドバイザーのご指導から

○イギリスへの児童の関心を事前に高めたことがよかった。新聞記事などで小谷村の友好都市オッタリーセントメアリー町との交流の様子を紹介し、修学旅行でイギリス大使館を訪れた。イギリスのイメージを持つこと、親近感を持つことにつながった。

○昨年度の「小谷の棚田」の授業での課題を踏まえ、児童が関心を持った分野を児童に調べさせていた。子どもたちそれぞれの興味・関心を「日本と似ている」「違う」「日本とのつながり」「発見」の4視点で整理し、考えることにつなげていた。

○グループ内でポスターセッション形式の発表をしたこと。青色の付箋に感想、黄色の付箋に疑問を書いて模造紙に貼った。付箋を活用したことで話し合いが活発になり、理解も深まった。場の工夫が教師対子どもだけではなく、子ども同士の話し合いを活性化させることにつながった。

全校研究テーマとかかわって

本年度は発達段階に応じて国語、社会の学習場面だけでなく、図工の造形遊びや総合、道徳など、新聞を身近な情報源、素材として活用する場面が増えてきた。新聞を読む、新聞にふれることを入り口に、新聞がすぐ手に取れるところにあるという環境が、自分で新聞を作る時に参考にしたり、調べ学習に活用したりする姿につながっていった。

研究授業でも、相手に伝えたい、聴きたいという思いを大切にテーマを設定し、調べ学習を進めてきたこと、発表場面で双方向のやり取りが生まれるような工夫（ポスターセッション）をしたことなどが子どもたちの意欲的な姿につながっていた。本、インターネット、人に聞く、そして新聞と、さまざまな情報源から調べ学習をしていく中で、それぞれにメリットとデメリットがあることを感じることもできた。①現実社会とつながっている ②情報源としての確かさ ③記事の読みやすさ といった、新聞の持つ有用性や魅力に自然と気づくことにつながっていた。

これからも新聞を活用しながら、小谷小学校の一人一人がいきいき輝く、「聴きたい」「伝えたい」授業をつくっていききたい。